「ヴァレンシュタイン」覚書 (1)

——オクタヴィオの人物像について——

海老沢　君　夫

シラーの作品「ヴァレンシュタイン」は1幕ものの第一部「ヴァレンシュタインの陣営」，各々5幕ものの第二部「ピッコロミニ父子」，第三部「ヴァレンシュタインの死」から成り立っており，「ヴァレンシュタイン三部作」とも呼ばれている。しかしこの三部作は関連する三つの独立した作品の集まりというよりは，むしろ総計11幕の一つの作品と見なした方が良く，その場合これはプロローグを除く総詩行が7625行という大部の作品となる。もっともこの作品で直接描かれる時空間は，時間的に見ればまる1日の空白を含む連続する3日間，空間的にいえばおおまかに分けて2ヶ所と大規模な作品には似つかわしくないほど限られている。このことはしかし事件の背景を把握するための資料不足にはつながらない。むしろ出入りする人々や回顧的科白を通じて他の地域の出来事や過去の事実が次々に眼前の出来事の背景を作ってゆく。幾分誇張していえば，この劇の背景はヨーロッパ全域であり，30年戦争がはじまって以来の16年間であるといえる。それゆえ非常に限られた時空間を描いた作品とはいえ，この作品の全体を一概に語るということは容易なことではない。しかしあえて語らなければ事がいっこうに進まないとすれば，おぼろげながらの全体を背景にしてでも一つ一つについて語り，それらの集積としてのより正しい全体を待つよりしかたがない。ここではそのひとつとして登場人物のひとりオクタヴィオ・ピッコロミニに焦点を当て彼の人物像を描いてみる。

オクタヴィオは主人公ヴァレンシュタインとともにその輪郭を描き難い人物である。もっともその原因は対称的であり，後者の場合の資料過多に対し前者の場合は資料不足なのだが，この方はそれに加えて舞台上での主な行動が主人公ヴァレンシュタインを，しかも自分を心から信頼しているヴァレンシュタインを裏切ることであるために，しばしば誤解を受け，また平板化される。しかしオクタヴィオはマックスと並んで重要な副人物のひとりであり，とりわけこの劇における反ヴァレンタイン勢力の先鋒としての役を担っている。それゆえたとえオクタヴィオがヴァレンシュタインより遙かに重要には見えないにしても彼を誤解することはヴァレンシュタインの反対勢力を誤解することにつながるのである。広大な背景を持った作品であってみれば，その中でうごめく人物たちひとりひとりを生き生きと思い描くことは常に必要なことであるが，ここでとりわけオクタヴィオを扱うのは以上のような理由からである。

1

ところでオクタヴィオの人物像を描くにあたっても，やはりあらかじめ留意すべき点があるであろう。ここではそれをほぼ次の三つにまとめておこうと思う。

ひとつはこの作品の筋はヴァレンシュタインを中心に展開し，また描写される出来事はすべてヴァレンシュタインの勢力圏内のそれに限られている，そしてこのことは必然的に彼および彼の軍隊が，外部からいかに見られているかを考察するための資料を乏しくさせる，ということである。もちろんカプツィン僧やクヴェステンベルグ，あるいはエリザベートやオクタヴィオの言葉の一部はその役割を果すのだが，これらも宮廷側について語られるヴァレンシュタイン側の言葉の量と勢いに圧倒される。双方が相対立している限りは相手を語る場合，互に攻撃的，否定的にならざるを得ないのだが，今述べたような描写方法，あるいは構成は相対的にみて宮廷側に不利に働く。そしてこの不利な状況は直接オクタヴィオについてもいえるのである。というのはオクタヴィオをヴァレンシュタイン側と思っているのは当のヴァレンシュタインだけであって，他の者，すなわちイルローやテルツキー夫妻は彼を宮廷側の手先と見なしているからである。それゆえ彼らのオクタヴィオ評は当然のこととして否定的であり，しばしば公正さを欠くのだが，にもかかわらずそれは，他に彼について語られる個所が少ないがために，彼の人物像を描くさいの貴重な資料になり易いのである。

次に留意すべき点は，ヴァレンシュタインの謀叛が，しばしば旧体制である宮廷に対する進歩的勢力の反抗と見なされ易いことである。しかしこれは否定されなければならない。ヴァレンシュタインはなるほど皇帝を頂点とする体制への反抗を企てはした。しかしその主たる理由は明らかに皇帝に対する私恨であり，さらに飽くことのない野心である。彼の謀叛の行き着く所は，その計画によれば皇帝に強制してヨーロッパに平和をもたらし，その報酬としてボヘミア王に任命されるということであった。しかし彼は戦争の遂行を通じても，軍の支配者としても，いかなる意味においても人民の立場には立たなかった。「ヴァレンシュタインの陣営」に登場する農夫の語るところによれば，ヴァレンシュタインの軍隊は反皇帝軍であるザクセン軍以上に彼らを苦しめたし，その中でもとりわけ彼の親衛隊的存在のテルツキー連隊はそうだったのである。このことはこの連隊に属する兵士の言動からも窺われるし，また傭兵の維持には強力な軍隊による人民の徹底した搾取が必要であり，それゆえに二万の傭兵より六万のそれを養う方が容易であるとするヴァレンシュタインの考えからも察せられる。彼が他人を考えるさいの限界は，一番広く見て下級兵士までであって，けっして百姓人民にまでは及んでいない。また彼の謀叛の大義名分であるヨーロッパの平和の確立ということは，それが彼の性質に合うことではなく，むしろ彼の存在基盤を揺がす事であるがゆえに，かならずしも文字通りには受けとれないが，たとえそ

の通りであったにしても，それが人民を主体に考えたものでないことは確かである。もちろん宮廷の在り方と軍隊の在り方は違う。しかしこの違いは旧と新とに分けられる違いではないし，不正義と正義に分けられるようなそれでもない。ヴァレンシュタインが宮廷を昨日の世界と称しているのは，相手勢力の性質を自分なりに名付けたのであって，歴史的進歩という立場からそう言っているのではない。わずかに，エーガーの市長に対しては，宮廷的体制を市民の立場に立って批判し，その側に立とうとする素振りを見せる。しかしヴァレンシュタインのそれまでの言動から推して，それがどこまで真意であるかは分らない。このようなことを考慮するとヴァレンシュタインは進歩的，宮廷およびオクタヴィオは保守的・反動的という図式を作り，それに従ってオクタビィオを評価するのは当を得たことではない。

最後に留意すべき点は，彼の息子マックスを理想的道徳的人間と見なすがために，マックスのオクタヴィオ評をうのみにし，オクタヴィオをただちに反道徳的と規定するとすれば，それはこの劇を鑑賞するさいの本筋から離れることになりはしないか，ということである。なるほどマックスの言動はかなり一貫しており，その形姿もヴァレンシュタインやオクタヴィオより明確である。彼はあるべき姿をはっきり語ることができるし，他人に対しても鋭い批判を下すことができる。しかしこの言動の源である彼の「心」は，周囲の状況をかならずしも正しく把握してはいない。ヴァレンシュタインの妻子を迎えるお供から帰ってきたばかりの彼の心の状態は，彼の父が言うように，いや彼自身さえも言うように20日前にその為にここを出発した時と大いに違っている。その違いの最大の原因は彼がお供をしてきた当の人，ヴァレンシュタインの娘テクラとの恋なのだが，彼はいまや今まで以上にヴァレンシュタインに対して親愛の情を抱き，宮廷に対しては著しく反抗的になり，加えて恋に悩む心落ちつかない若者として登場する。〔P–I–4〕でのクヴェステンベルグやオクタヴィオとの会話はすでにそれを表わしている。挨拶そこそこに宮廷を非難する話振りや，オクタヴィオの言葉の中の平和という一言をきっかけに話の本筋から遠く逸れて，自分の抒情的気分に浸り込んでゆく姿は，それ以前に語られる甲騎兵やイゾラニのマックス像とは趣きを異にする。自分の心の絶対的正しさを信ずるマックスが正しいのは，その心が現実の中に対象のない一般的観念と関係している限りにおいてである。主観性があまりにも強いこの青年は外部の状況を的確に見ることはできないし，また他人の立場からものを考えることもしない。例えば彼はヴァレンシュタインを自分の行動の尺度とし彼を次のように考えている：天賦の支配者的要素を持つ者，創造力を持つ者，心広く恵み深い者，他人の天分を開かせる者，平和の使者……。他の者のヴァレンシュタイン評とは質の違うこれらすべては，なるほどマックスでなければ捉え得ない所のヴァレンシュタインの特性ではある。しかしマックスはこれらの性質を無雑なまでに純化し，遂には現実とは別の自

分自身の中にある理想的人間の映像と一致させるに至る。欺くことを極端に嫌うマックスではあるが，ヴァレンシュタインが彼を欺いているとは知らない。人格性に誠実であろうとする彼ではあるが，ヴァレンシュタインのブットラーに対する計略や甲騎兵たちとの会見の動機について，——総じてこの支配者の部下に対する基本的認識について知らない。そして今までは部下としてよりも，むしろ友として対してきた彼にも，それがあからさまになった時，そして現実のヴァレンシュタインと彼の心の中のそれの違いがはっきりした時，彼ははじめてそれらすべてを驚愕しつつ感じとるのである。このような経緯を見てくる時，彼の痛烈なオクタヴィオ批判のすべてが，正しい状況把握の中でなされたかどうかは，はなはだ疑問になってくる。

さらに彼のオクタヴィオ評を考慮する時には次のことを念頭に置くべきである。すなわちオクタヴィオとマックスは同じ土俵にはいないということである。例えば「義務」ということは双方にとって等しく行動原理ではあるが，各々のそれが意味する所は大いに違っている。オクタヴィオにとっては義務は単に皇帝への服従を意味するが，マックスにとっては（使用個所によってニュアンスの違いはあるが）結局は人間性に対して誠実であることを意味する。それゆえマックスにいわせればオクタヴィオのいう皇帝への服従義務はヴァレンシュタインの信頼を裏切ることを正当化しないし，（またヴァレンシュタインに関していえば）いわゆる外部からの強制は皇帝軍を敵に売って皇帝を攻めるための理由にはなり得ない。マックスにとって重要なのは二者択一の方法をとって行動することではなくて，自分の心に照らして得たところの正義を行うかどうかである。彼にいわせればオクタヴィオにとって（も，ヴァレンシュタインにとっても）もっと先にやるべきことがある，すなわち彼らはまず人間の信頼性に基づいた行動を行うべきなのである。マックスはこのことを双方に説くのであるが双方から等しく拒否される。そしてそこにおいて彼の「義務」は現実における活動の方向を見失い，実質性のないものとなるのである。彼は結局，人間性への誠実に反したことには組しないという行動を通じて，かろうじておのれの自律の精神を示す。しかしこの行動は現実に絶望し，現実に目的を持たず，あえていえば死そのものが目的の行動であったがゆえに悲惨極まりないものとなるのである。マックスのこのような生き方はその恋人テクラのそれとともに純粋無垢な生き方であり，この作品にあっては異色のものである。そしてこの作品の舞台となっている所は元来他の者が生きるべき所であってもこの二人が生きるべき所ではない。それゆえ彼らと対置されるべき者は，単にオクタヴィオだけではなくて，そこにいるすべての者なのであって，オクタヴィオだけが特にマックスの世界から批判されてはならないのである。

2

さて以上のことを念頭に置きつつオクタヴィオの行動を見てゆくことにする。この為にはまず彼の行動の背景となっている事件，あるいは勢力関係を知る必要があろう。

30年戦争の前半，皇帝フィルデナンドに認められた軍人ヴァレンシュタインは諸々の戦いで軍功をあげ，その名を全ヨーロッパに響き渡らせた。皇帝は軍位と爵位を異常な速さで最高位に引き上げることをもってこれを報い，一方ヴァレンシュタインは諸候の恨みを一身に買ってまで皇帝の権力を強めることに奉仕した。しかし諸候の反感と羨望の念は日々大きくなり，彼らは遂にヴァレンシュタインの免職を要求する。これを容れざるを得なかった皇帝はやむなく彼を免職にするのだが，職を解かれて領地で暮らす彼の人となりは，まったく変わってしまう。皇帝への失望は反感に変わり，遂にはかかる諸候たちの筆頭，バイエルン公に対すると同様，憎しみをさえ感ずるようになる。そして占星術に身を入れはじめ，自分の運命をジュピターの運行と結びつけ，何ものかを待つような生活を送っている。とかくするうちに戦況は皇帝側に不利になり，総司令官ティリーは戦死する。この事態を収拾するのはヴァレンシュタイン以外にはないと見た宮廷は，彼に再び総司令官への就任を依頼する。事の成り行きを利用し大巾な譲歩を得てこれに就任したヴァレンシュタインはたちまちのうちに強力な軍隊をつくりあげ，さらに敵王グスタフ・アドルフを戦死させるに至る。しかしこれ以後の彼の行動は宮廷にとって不可解なものとなる。バイエルンへの援軍を断り，ボヘミアを占領し続け，レーゲンスブルグへの援軍をしぶってこの陥落を許す。一方においては敵方との交戦を避け，せっかく捕縛した戦争の火つけ役，トルン伯を宮廷の許しなく釈放し，さらに義弟のテルツキー伯を通じて敵方との取引きを始める。一方，事を探知した宮廷はオクタヴィオを通じてヴァレンシュタインへの監視体制をとる。オクタヴィオはヴァレンシュタインの周りにおいたスパイを通じて，あるいは彼を信頼して語るヴァレンシュタイン自らの言葉を通じて，確実な情報を入手し，それへの対策を秘密裏のうちに進めている。ある時ヴァレンシュタインは口実を設けて自分の妻子を呼び寄せ，またある目的をもって麾下の連隊長たちを召集する。召集された連隊長たちのうち2人を除いた30余人がその軍隊を引きいてヴァレンシュタインの陣営に集まってくる。一方宮廷は彼の直接指揮下の軍を弱めようとする策をもって軍参議官クヴェステンベルクを同じ陣営に派遣する。

この作品は本来ここから始まるのである。最初の幕，すなわち第一部「ヴァレンシュタインの陣営」ではかくして集まってきた兵士たちの状況が描かれ，それに続く第二部の数幕では主として連隊長たちの世界が描かれる。プロローグでも語られるように軍隊はヴァレンシュタインの勢力の基盤であり，また没落の原因である。第一部が描くものは結局，かかる軍隊，いいかえれば彼の勢力基盤の構造であるといえよう。ここに集まった連隊は

ヴァレンシュタイン麾下の最良の部分であり，彼らの連隊長の多くは，そして彼ら自身も，彼の恩義を直接間接にこうむっている。彼らは一様に彼の軍事的才能を認め，そして今後も彼につき従っていくつもりでいる。しかしその理由，あるいはその気持の度合となるともはや一様ではない。彼ら傭兵の多くは，祖国も固有の宗教も持たず，常に暮らし易い所，利益の多いところを求め歩く者である。それゆえ彼らの中には以前敵側，すなわちスウェーデンやザクセンの軍隊にいた者も少なくない。彼らが今ここヴァレンシュタイン軍にいるのもヴァレンシュタインが常勝の将軍であり，従って分け前も多く，加えて非戦闘時は他の軍よりもずっと規律が緩やかだからにすぎない。このような兵士たちにとってはヴァレンシュタインの個人的人格は問題にならないし，また自分たちの最終的主人である皇帝も彼らの念頭にはない。しかしこの雰囲気が軍隊を一色に塗りつぶしているわけでもなく，一方ではヴァレンシュタインも結局は皇帝の臣下である，と公言する者もおり，また軍隊の自由そのものを心から愛している者もいる。これら兵士たちの雰囲気は彼らの連隊長の在り方とも呼応する。〔P–II–7〕で等しくヴァレンシュタインへの忠誠を誓ったように見えた彼らは〔P–IV–7〕では微妙な違いを見せはじめ，そしてそれがそのまま「第三部」における彼らの行動に結びついてゆくのである。

連隊長，兵士たちのこのような動きとは別にヴァレンシュタインは自分の麾下の軍隊に関して絶対的自信を持っている。彼は連隊長たちには前々から多くの報償を与えているので，彼らが自分から離れていくことはないと確信している。このような自信，確信を持つ彼は放慢とさえいえる余裕をもって宮廷からの要求を拒否する。しかし彼は皇帝という名が連隊長たちに及ぼす効果を明らかに過少評価していた。このことは彼とスウェーデンの軍使ウランゲル，あるいは腹臣イルローとの会話の中にはっきりと現われている。事はこのような状況の中で急速に進展する。オクタヴィオはヴァレンシュタインに対して直接的対抗処置をとり始める。一方ヴァレンシュタインは事の最終決定力をいまだ持っていると思っており，それを天体の運行に託しつつ星を観測している。遂に待ちに待った吉兆が天空に現われるが，それと同時に彼らとスウェーデン軍との仲介者ゼシンが皇帝軍に逮捕されたとの知らせも入る。さらに，同じく事を知ったスウェーデン軍が，同盟関係に関する最終決定を迫って彼にさし向けた軍使が到着していることも知らされるのである。最良の時期に自分が主体的に決定できると思っていたことは，こうして外的状況から迫られた形で決定されることになる。そしてこれを境にして彼の企てはすべて崩れてゆくのである。行動の第一歩として命令を与えた「友人」オクタヴィオはいわゆる裏切者としての正体を現わし，連隊長ひとりひとりを味方に引き込もうとする企てもオクタヴィオに先を越され，ピルゼンとプラークの連隊を互に利用しつつ相呼応させようとする企ても遂に失敗する。彼はしかたなくエーガーに退くのであるが，そこで彼を待っているのは自分が新たに信頼

の情を抱きはじめたブットラーによる暗殺なのである。

事のこのような展開がオクタヴィオとヴァレンシュタインの関係の背景となる。それでは二人の個人的な関係はどうであったろうか。

ヴァレンシュタインの言葉によれば彼らはすでに16度も共に戦かい，また同じ軍中で食を共にしたという。またマックスとヴァレンシュタインとの関係から考えても，オクタヴィオとヴァレンシュタインとの関係は，そうとう古くから結ばれていたといえる。しかしオクタヴィオとヴァレンシュタインの関係がヴァレンシュタインとマックスの関係ほど親密でなかったことも確かである。彼ら二人の間では過去の親密さの基盤に立ったような話し方はなされないし，またそのような事実もなかったようである。わずかにリュッツェンの戦いの日（これはこの舞台の時よりわずか15ケ月前にすぎない）の朝の出来事のことがあるが，これも二人を共通の思い出に浸らせるようなものではない。ヴァレンシュタインにとっては，これはオクタヴィオが自分にとっていかに信頼できるものであるかを自分に確信させる出来事ではあったが，しかしこれはまた，それまでオクタヴィオが彼にとって最も信頼できる者ではなかったことを示すことであり，また彼への信頼が夢合わせとか占星とかと結びついた結果であることを示すことでもあった。一方オクタヴィオにとってはこれは些細なことのひとつにすぎなかったし，また，それ以後のヴァレンシュタインとの関係を見ても，相手が親しみの情を示すに反比例するように彼への親しみの情はなくなっていくというふうであった。しかしいずれにせよこの出来事以来ヴァレンシュタインはオクタヴィオに絶対的信頼を示すようになる。そしてことは先に述べたように展開するのである。

主だった連隊長すべてが同席する〔P-II-7〕を除けば，この作品の中で両者はたった一回しか顔を合わせない。それは〔T-II-1〕なのだが，ここでは謀叛を決心しスウェーデン軍と取り決めを終えたヴァレンシュタインが，その為の行動の第一歩としてオクタヴィオにその行動を指令するところである。彼の話振りは相手への信頼に満ちている。相手の性質を知り，また彼が自分の計画に乗気でないことを察している彼はそれに似合った行動を指令し，その遂行のために自分の馬を提供しさえする。オクタヴィオの方は終止黙したまま，相手には一言も語ることなくこの任務を引受けて去る。20詩行分にすぎないちょっとの間の光景であるが，これは二人の個人的関係を象徴的に表わしているといえよう。

3

ヴァレンシュタインとのこの関係に注意を向ける時オクタヴィオ像にはどうしても一種の厭わしさがまとわりつく。加えてヴァレンシュタインが多方面から，しかも諸々の矛盾した側面を包含する巾広い人間として描写されているのに対して，オクタヴィオの場合は

自ら語ることも，語られることも少なく，ただ目的に沿った行為，しかも主として自分を信頼する友を裏切る行為のみが描かれるため，この対比がかかる印象を一層強くするのである。しかしオクタヴィオを真にヴァレンシュタインに対比させようとすれば，やはり書かれていない部分を補いつつ同じ条件のもとで対比させなければならない。そしてそのためには当然のことながら書かれている部分から少しでも多くのものを読みとらねばならないということになる。

オクタヴィオはヴァレンシュタイン（50歳）より年とった者として描かれている。（序ながらいえばマックスは25〜30歳，テクラは20〜25歳位と見ることができよう）。彼はロンバルジアの名門の出の貴族（伯爵）であり，それゆえ宮廷とは良く通じているし，マックスもまた宮廷からは信頼されている。このような家系に育った彼はその素性よりして保守層に属する。彼にとっては形式や慣習，法律などに従うことは，曲り道ではあるが最も安全な道であり，それはまた個人の恣意を束縛して現体制と平和を維持することでもあった。そして現体制の頂上にある皇帝は彼にとっては地上における最高の命令者であり，それへの服従は彼の行動原理なのである。

このような彼からすれば力を頼んで皇帝に譲歩させ，しかも皇帝の命令を無視するヴァレンシュタインは，とうてい共に歩むことのできない者であったろう。加えてヴァレンシュタインは皇帝の軍隊を盗んで敵方に売り，その敵と合流して皇帝を攻めようとするのである。そうである限りは彼にとってヴァレンシュタインは単に友でないばかりではなく完全に敵とならざるを得なかった。事実彼はヴァレンシュタインが自分を友と見なしているのとは無関係に相手を敵と見なす。オクタヴィオが先に宮廷に知らせたのか，宮廷からオクタヴィオに命令が来たのかは明らかではないが，ともあれ彼の行動は国家政策中の主要な任務のひとつになっている。そして彼にあってはこの遂行が最大の関心事となり，一切がこの点から見られ，かつ処理されることになるのである。

ヴァレンシュタインより的確に現実を把握しているオクタヴィオはいたずらに悲観的になることもない。〔P-I-3〕でクヴェステンベルグが陣営内のあまりにも強い反宮廷的雰囲気を嘆き，また当時の帝国内のありさまを嘆いた時彼は次のように言う。「あまり早くから落担するのはよしましょう。（P-331）」というのも彼は兵士たちの気質や軍隊の在り方をほぼ正確に判断していたからである。「話すことはいつも行動よりは勇ましいものです。今は盲目的な熱狂に駆られて極端なことを為そうとしているような者たちも，おおそれた行為の何たるかを知れば覚えず胸に感じいることでしょう。（P-332ff）」

他人を把握することにおいても彼はほぼ当を得ていた。そしてそれぞれの性質に応じた対応の仕方をするのである。まずヴァレンシュタインに対しては事を告げられても強くは反対しなかった。彼によればヴァレンシュタインはその性質からして他人の意見を必要と

しないからである。オクタヴィオのこの判断は的確であって，この事はイルローやテルツキーに対するヴァレンシュタインの言葉の端々に現われている[1)]。ヴァレンシュタインによれば臣下は主人たる自分が決定したことをただ行うだけでいいのである。ましてや秘事であるそのことに反対した場合，オクタヴィオは最良の場合でも軟禁は免れなかったであろう。それゆえヴァレンシュタインに対する彼の行為は一部には防禦的意味もあったのである。このことはマックスに自分の意図を秘めていたことに関してもいえる。彼は真相を知った後のマックスはその性質からしてヴァレンシュタインの前で平気を装うことはできないと知っていた。マックスに事を隠していた主な理由はまさにこれなのであって，彼を通じてヴァレンシュタインを安心させようとするのは，あくまでも副次的効果にすぎない。

イゾラニとブットラーを味方に引き込むにさいしても，それぞれの性質に合った方法をとっている。とりわけ後者に関してはそうとう周到な用意がなされており，事の決め手となる手紙を入手していることは別にしても，その工作はすでに〔P–I–2〕から始まっている。この場面で彼はすでに三人の相手のうちのイルローを意識的に無視している。クヴェステンベルグを前にしてブットラーとイゾラニを誉め，また彼らが宮廷の批判を行なったあとにはとりなしをし，二人が過度の悪口ゆえに引き返すことができなくなるのを未然に防いでいる。オクタヴィオはまた〔P–IV–6〕においてもブットラーに近づいており，〔T–II–6〕における彼への用件の持ちかけはこのようなあらかじめの下地の上になされるのである。この場面でのオクタヴィオの語しかけは巧妙である。彼は名誉心が強く誇りを傷つけられることに極端に敏感な相手の弱点を利用して彼を一気に味方に引き入れてしまう。

ところでこのオクタヴィオは例えば上記の人物たちにも言っているように自分は正しいことをしていると終始確信している。皇帝に絶対的忠誠をつくす彼にとっては，これに謀叛を起そうとするヴァレンシュタインは悪人である。そしてかかる悪人を倒すのは，そのためにたとえ悪しき手段を使おうとも正しい事なのである。オクタヴィオにあってはイゾラニに問うに謀叛に加わるか否かである。ブットラーに問うに30年間守ってきた（忠誠という）良きもの棄てるか否かである。彼はヴァレンシュタインのように最初から具体的報賞を前面に出そうとはしない。

正しい事を行っているというこの確信は断固たる行動を生む。〔P–IV〕までは比較的受動的だったオクタヴィオは，宣誓状の件とゼシン逮捕の件に接するや，積極的行動に転ず

1）ヴァレンシュタインがテルツキー伯爵夫人に説きふせられたその事だけで謀叛を決定したとは言えない。同じように，先にマックスに諫止されていたら逆の決定をしたと想定するのも疑問である。妻子を自分の所に呼び，連隊を召集し，彼らに無条件服従の宣誓書を要求するのは彼が重大な方向決定を行なっていることを意味するのであって，残されたのは時期の問題だけになっていたのだと解していい。しかもこの時に至るまで彼はこのことについては誰にも相談はしなかった。

る。このことに関してはいざ決行という時にためらいを感ずるヴァレンシュタインとはまさに反対である。ヴィレンシュタインは他人には一応自分の目的はヨーロッパにおける平和の確立であるといっている。しかしこの大義名分にはその報賞として自分は今占領しているボヘミアの王となるという付帯事項がついている。というよりはかかる大義名分さえかならずしもほんとうとは言えない。つまるところ謀叛の理由は彼の私恨と野心だからである。それに加えて敵と結び，祖国を攻めるのであるために，どうしても後めたさがつきまとう。とかくするうちに主体的決定の時期を失ない事の主導権を失なうのである。一方オクタヴィオの方は自分の任務の重大さを自覚し，また〔P-V-1〕でも言うように，それが失敗した時の覚悟をも固めている。しかし彼は敵中に孤立しているわけではなく，イルローやテルツキー夫妻も認めているように多くの連隊長の行動を左右し得る位置にある。テルツキー夫妻などは彼を留めるためにテクラをおとりに使ってマックスを引き留めようとしさえする。ともあれオクタヴィオは秘密裏に彼の手に渡された皇帝からの書状を後盾に，これらの連隊長たちを掌握し，またヴァレンシュタイン寄りと見られていたイゾラニとブットラーをも味方に引き込む。このように慎重かつ確実に可能な限りのことを為し終えた彼は次の行動に着手するためヴァレンシュタインの陣営を去るのである。

しかしこのようにひとつの目的にのみ眼を向けた行動は事がらの多くの側面を，そして時にはその本質を見逃し易い。例えばマックスがテクラに恋をしていると気付いた一瞬彼の脳裡をかすめたのはヴァレンシュタインがマックスを引き止めるためにテクラをおとりに使ったのではあるまいかということである。この判断はある意味では間違いとはいえないが，少なくともマックスとテクラの関係の本質は明かに見誤っている。もちろんその時の彼の判断がただ政治的側面にのみ関心を示した為の結果であると言えないわけではない。しかし当のものにとって本質的であるかどうかを問わず，その側面のみを重視することは，その後の行動が直接その判断に基くだけに時として非人間的な印象を与えるのである。

4

ここではオクタヴィオの別の側面を見るために，また彼の輪郭の不鮮明な部分をなるべく取り除くために次の問を掲げてみる。1) オクタヴィオは人の感情に通ぜず，また人間の精神的あるいは道徳的側面に関心を持たなかったのではあるまいか。2) オクタヴィオはヴァレンシュタインの陥れを計り自らの候爵昇格を企てたのではあるまいか。また彼はブットラーにヴァレンシュタンン暗殺を示唆したのではあるまいか。

1)に関していえば彼は確かに人間の在り方についての特別なことはほとんど語らない，とりわけ他の主要人物がよく口にした運命という言葉さえも彼は口にしない。このことはとくにマックスとは対称的なことであるが，しかし語らなかったことがかならずしも無か

ったことを意味するのでもない。政治の事で頭がいっぱいになっている時，他人の恋愛をもその側から見たとて恋愛の本質を知らなかったとは言えないだろうし，自分の行動が全能の神の加護の下にあると――たとえ習慣的にであっても――信ずるものが運命について語らなかったとしても特別不思議なことではない。彼が人間の精神について語らなかったのは彼が置かれていた状況と大いに関係する。すなわち彼が行うべく定められていたものはあまりにも地上的なものであり，地上的な眼で見てこそ的確に判断できる世界の出来事であった。それゆえその遂行に勤しみ，あるいは追われた彼はたとえ精神について語り得たにせよ，その機会を与えられなかったといえるのである。

これらのことに比べれば彼の感情的側面は比較的描写されている方だといえよう。といっても相手がマックスである時のみであるが，他人と語るにあまり表情をも変えない彼もこのひとり息子に対してだけは感情をあらわにし，また親しみやいたわりの情を見せる。例えばマックスがヴァレンシュタインを尊敬していることを知っている彼は，息子にヴァレンシュタインの行動を知らせる時，長い間尊敬してきた者の映像をこわさなければならない相手に対して同情の念を禁じ得ない。またマックスがテクラのところに行こうとするのを引き止めようとするのは，単に相手側がそれを利用して息子を引き留めることに対する心配からばかりではない。強い感情に支配されているこの青年は別れのために行くとはいいながらそこで激しい葛藤の念に駆られるだろうことを，そしてその葛藤を留まることで決着をつけるもつかの間，こんどは父と戦わねばならないだろうことを予想したからである。「……もしおれの息子，おれの血筋であるおまえが――こう思うのは許されぬ事だが――恥ずべき事に組みし，貴族であるおれたちの家系を罪の名で汚したとしたら，その時は世間にむかい忌むべきさまをさらすことになろうぞ，そして恐ろしい戦いのさ中で息子の刃が父の血潮にひたることになるのだ。(T-1249ff)」　オクタヴィオのこの言葉には体面を気にする貴族の素性がまだ強く残っているともいえよう。しかしこれは十数行後の次の言葉――これが両者の間の最後の言葉なのだが――と重ね合わせて読まなければならない。「どうしたことだ，情のこもったまなざしも別れの握手もないのか。おれたちが行こうとしているのは血なまぐさい戦いの中だ。しかも勝つか負けるかはさだかではない。こんな風な別れ方は今までになかったことだ。とすると，ほんとうのことか，おれにはもう息子はないのか。(T-1275ff)」　この言葉には何よりも親子が別れること，しかも理解し合う事なく別れることへの彼の苦痛がにじみ出ている。願いといってもいいような自分の命令を聞かず，なおも自分を軽蔑しているマックスに，彼の為にと最良の部隊を残してゆくオクタヴィオの心は――それが永遠の別れであることを察しているがゆえに――候爵になっても家系がとだえるなどというイルローの憶測する心配を遙かに越えた荒涼たるものであったろう。

一方息子の方は父が息子を思うほどには父を思ってはいない。もの覚えがついて以来ヴァレンシュタインの側にいる事が多かった——そのようにうかがわれる——からであろうか，彼のヴァレンシュタインに対する態度と父に対する態度の間にはあまりにも大きい相違がある。「あなたに会うにふさわしくない状態では，二度と会うことはありますまい。(T-1265)」というマックスの言葉は一見父を尊敬した言葉のようにも解せる。しかしその後の彼の言葉，あるいは次の幕での彼の言葉を聞けば，これは父を肯定した言葉でも父と和解した言葉でないことが分る。父の最後の言葉，「おれにはもう息子はないのか」という言葉に対しては彼は父の胸に身をなげる。しかしこれは父を理解しての行動というよりはむしろ親子の血ゆえの行動だといって良いであろう。マックスがオクタヴィオの行為を最後まで肯定しなかったことには変わりはない。大事な兵力から一千余の部隊を護身用にと置いていくつもりの父に対するこのような態度と「……君は君自身のものか，君自身の命令者か (T-2179f)……」という自律を旨とする彼にとっては最大の侮辱であるはずの言葉を吐き，自分と戦闘を交えようとさえするヴァレンシュタインへの態度を比べて見る時，息子から父への内的結び付きがいかに弱かったかが分るのである。

この最大の原因はもちろんオクタヴィオには人間性に対する誠実さがないとマックスが判断したからであったが，二人の間に横たわっているものは，結局はかかる誠実さを保つことそのものを目的とする者と，その他のことを目的とする者の違いである。しかしかかる誠実さと現実の目的の間の葛藤がオクタヴィオにはなかったと一概に言うことはできない。前述のように彼は確固たる信念の下に行動する。しかしその信念は葛藤を経，あえて二者択一の決断を下したあとの心であるともいえるのである。自分は一応ヴァレンシュタインに反対の旨を語ったと言ったり，彼に嘘や偽りを言って信用させているのではないと弁解しているのは自分の内的葛藤をどうにか理屈で押え込んだなごりであると見ることもできる。また先に示した形式や法律に対する彼の見解は彼が生き，かつ葛藤を経たのちに行き着いた老人の結論であるともとれよう。しかし彼がこの劇中で下した結論と，それに基ずく行為は常に政治的判断が基盤になっていた[2]，そしてそれゆえにマックスと共通のものを有することもなかったのである。ヴァレンシュタインに対する彼らの評価の相違もこれに関係している。オクタヴィオはヴァレンシュタインを彼の宮廷との関係を中心として見た，それに対してマックスは彼の精神の中に眼を向けたのである。

次に2)に関してであるが，オクタヴィオ自身は候爵位を狙っていたことを窺わせるような発言をしてはいない。こう言っているのはイルローとマックスである。後者の場合はと

2) 連隊長たちの在りように関する見解のイルローとの類似やマックスとテクラとの関係について考えるさいのテルツキー夫妻との類似を考慮する時，われわれはオクタヴィオの立つ基盤とこれらの人々が立つ基盤の間には多くの共通部分がある事を認めざるを得ない。しかしこの小論は同時にそれらが同じものでないことを強調しようとしているのである。

りわけオクタヴィオの面前で語るのであるが，その時彼はそれを驚きをもって否定している。この驚きを心底からのものと理解していいであろう。これを語るマックスにしても，その時は他人をまったく信じられないほどうちのめされていた時であった。またイルローのそれは彼のオクタヴィオ評がしばしば偏見に満ちていることからすれば特別問題にする必要もない。また，ブットラーにヴァレンシュタイン暗殺を示唆した云々はブットラーその人が語ることであるが，これは彼の自己弁護，あるいは自己の正当性の主張の為の言葉と見ていい。この件に限っていえば有名なイヴァンとスメルジャコフの関係にも似ている二人のそれだが，なるほどオクタヴィオは別れる時の雰囲気からしてブットラーに殺意ありと気付かなかったとはいえない，しかしそれが暗殺を示唆したとか，黙認したということにはならないのである。彼は職務上の必要から前々の計画に沿って城を去ったのであるし，またそのさいブットラーにも共に去ることを勧めたのである。さらにブットラーの殺意を感知したとしても，それがあくまでもはっきりしないうえは自分から先に禁止するのも不自然なことあった。またエーガー城内でブットラーがゴルドンに見せる皇帝からの手紙（これにオクタヴィオが関係していたことは確実であろう）の内容も，あのような場合の命令としてはごく普通のものであって暗殺を特に命令したものではない。軍を引きいてエーガーに向かっていたオクタヴィオは以後に起るいろいろの可能性を想定し，それらへの用意と覚悟をはして来たろうが，ヴァレンシュタインが暗殺されているとは思わなかったろう。ブットラーを叱責する彼の姿はけっして偽りのものとは思われない。逆にテクラには公爵家がそのまま引き継がれ，テルツキー伯爵夫人は保護されるという彼の言葉をきけば，彼の意図はヴァレンシュタインを生きたままで捕え――例えば蟄居などの――穏便な処置にするつもりであったと考えられる[3]。

しかし彼がヴァレンシュタインを失脚させようとしたということについてはまったく可能性がないわけではない。しかしもしこれが事実であったにしてもそれは彼個人の判断によるものではなく宮廷全体の判断によるものであろう。宮廷はヴァレンシュタインの力を単に信頼できなくなったばかりでなく，それに恐れを抱き始めていた。しかし彼が司令官になった時の約束からして軍については口出しはできなかったので宮廷にとっては彼の更迭そのものが急務となってくるのである。そしてそんな時に明るみに出たのが彼の敵側スウェーデンとの取引きのことであった。これは宮廷側にとっては確かに恐るべきことではあったが，他方彼を失脚させるための絶好の口実でもあった。宮廷はオクタヴィオに命じてできるだけの対策を講ずるとともに，その証拠を入手することに全力を傾ける。そして

3）それともオクタヴィオはヴァレンシュタインの死を知らされた瞬間，危険な人物が死んでしまった今はむしろそれを事故死として扱って形式的に家を継がせ，宮廷にとっても恥さらしな謀叛事件を闇に葬ろうと思いたったのであろうか。これに類似したモチーフは次作「マリア・スチュアルト」にないわけではないのだが……。

その証拠を摑むや否や機を制してヴァレンシュタインを倒そうとしたと考えられないこともない。あれだけの急速な勢力の逆転は連隊長たちの変わり身の速さもさることながら，オクタヴィオの以前からの手まわしがなければ不可能のように思われるし，何よりも彼自身の言葉の中に「実質的な一歩」を手をこまねいて待っているのが窺われるのである。しかしこのことはヴァレンシュタインが自ら謀叛について考え，占星を行いながらその時期を窺っていたことを否定するものではない。

5

オクタヴィオはこの作品の最後の部分にもう一度姿を表わす。彼はヴァレンシュタインへの凶行を知って驚愕し，凶行者ブットラーを非難する。しかしブットラーは，自分はオクタヴィオがとがらした矢を射たにすぎない，と言い残しつつ報酬を求めてウィーンに発つ。ヴァレンシュタインの一族の最後の者，テルツキー伯爵夫人は宮廷の保護を拒否して毒をあおぐ。二つの家系の者でただひとり生き残ったオクタヴィオに皇帝からの親書が届く。宛名はピッコロミニ伯爵でなくてピッコロミニ侯爵，この親書を中佐ゴルドンは非難のまなざしを向けつつ中将ピッコロミニに渡す。オクタヴィオ・ピッコロミニは苦痛に満ちた表情で天を仰ぐ。そして幕が降るのである。

この場面はオクタヴィオがいかなる人物であるかを総括する場面であろう。それまで描き得た輪郭を確かめ資料不足ゆえに決定できなかった線を最終的に補う場面でなければならない。それゆえわれわれにあっては(3)(4)に述べられたことがここに集中的に表わされなければならないのである。また逆に言えばこの場をいかに演ずるかは鑑賞者が彼の人物像を描くさいそれに遡及的な影響を及ぼすことにもなる。たとえばオクタヴィオの驚きがヴァレンシュタインの死を予想していたかのようにわざとらしかったり，また天を仰ぐ動作がいかにも白々しかったりしたならば，それらの動作のひとつひとつは鑑賞者のそれまでのオクタヴィオ像に浸透してゆくことになるのである。それゆえ彼を私欲と栄達の為に陰謀と偽善，そして二枚舌を駆使してヴァレンシュタインを倒した者と解しながらも，それまではそのことを十分に表わし得なかったと思う者は，この最後の機会を十分に利用しなければならないことになる。

とはいえ彼をそのように演ずる必要があるのであろうか。もちろんわれわれは作品全体から考えてその必要はないという立場から今までの文を綴ってきた。ここではしかしその理由を語る意味で「そのように演ずる必要があるのか」と再度問うてみよう。

そのように演じられた場合われわれがオクタヴィオから受ける第一の印象はまちがいなく厭わしさであろう。しかしこの劇に厭わしい人物が，しかも主要人物として必要であろうか。主人公ヴァレンシュタインが私利私欲に駆られた卑少な人間の工作のために滅びて

いったことが，この作品の内容なのであろうか。答えはもちろん否である。ヴァレンシュタインを滅ぼしたのはオクタヴィオでもブットラーでもない，それは突き詰めていえば彼の性格と周りの状況，いやさらに突き詰めれば結局は彼の性格なのである。

彼は遅かれ早かれ滅びなければならなかったであろう。マックスの語るように彼は天性の支配者的要素を持っていた。その性格はブットラーを抱擁する時も，苦境にあってマックスに懇願する時も，そして少数になった兵をひきいてエーガーに退却した時も決して失われはしなかった。また一方ではマックスの死にさいしてのテクラの心中を深く察し得るほどの心の柔らかさを持ち，さらには眼を地上以外のものにも向けて，天体，自然，人間の心の一切の支配するものを感じ，自分の精神，感情もこれによって変化するものと考えていた。しかしこの劇で彼を行動に導いたのは結局は私恨と野心である。自分に対する絶対的自信に基づいた支配者的要素は，これら私恨と野心とに結びつき皇帝からは軍に関する絶対権を要求して半ば独立した地位を築き，あるいは他人の人格を無視して部下を将棋の駒のように扱った。一方彼の周りの状況はと見れば，宮廷はその基盤である現体制をどうにかして維持しなければならなかったし，また軍の指揮権をいつまでも手放したままでおくこともできなかった。さらにスウェーデンは宗教上の理由もさることながら，国王までもが戦死したこの戦争では，意地でも領土的的成果を手に入れなければならなかった。一方ヴァレンシュタインは自分の野心を遂げようとすれば皇帝軍ではあり得なかったし，皇帝軍ではない彼は宮廷にとってはあり得べからざる存在であった。そして皇帝軍の名を捨てて彼が合流しようとしている当のスウェーデン軍にとっても，彼は当面のお互に利用し合う者以上の何者でもなかったのである。彼にとってさらに致命的だったのは彼の勢力の基盤である軍隊の在り方とそれに関する彼自身の認識の甘さである。先に述べたように軍隊の内部は彼を支持する者たちでさえ一枚岩ではない。この脆さは彼の参謀イルローさえ見破っていたが，彼の方は召集した連隊長たちから無条件絶対服従の誓約書をとれると思っていたし，また自分が謀叛人のレッテルを貼られた後になっても自分の顔さえ見れば反抗する兵たちも自分に従うだろうと思っていた。これは彼の自己過信ゆえの誤りだが，このような誤りは単にこれだけにはとどまらない，彼の星占いさえもが結局はこの誤りに立脚していたのである。

滅ぶべくして滅んでゆく人間が滅ぶのに何ゆえに卑少な謀事が必要であろう。悲劇が荘厳でなければならないとすれば，滅びゆく者は必然性に沿って滅びなければならず，また少なくとも主要人物の中に厭わしさがあるべきではない。個性を押し殺すような宮廷の中で生きるヴァレンシュタインも，自由な戦場で生きるヴァレンシュタインもその性格に忠実であろうとする限りは謀叛の道を歩まなければならなかったといえよう。

しかし謀叛の第一歩を踏み出す彼は，それが同時に自分の頭上に刃を掲げたのであるこ

とをも意識している。またエーガーに到着して以後の彼は，前の場面とはうって変って静かである。死んだマックスへの思いを通じて自分の青春をまで思いやるが，それに浸り込むわけでもない，前日の出来事に執着するわけでもなければ翌日のスウェーデン軍との合流を喜んでいるふうでもない。テルツキー夫人の夢も，ゼニの見た凶兆ももはや彼の心を動かしはしない，ただ前日に感じた復讐の女神の力をまた静かに感じているというふうである。しかし同時にそれを恐れもしない。自分の行為を後悔するでもなく，道徳的に悪びれるでもない，これはマックスを思い出している時でさえそうである。彼はただ起った結果を自分で背負い，行くべき所まで行くことを考えている。しかしそれはもちろん自暴自棄のゆえではない。覚悟してしかも死を思わず，静かにしてしかも振幅を失わない，彼は他人なら苦境というであろうさ中に自分の人格の全幅を表現しながら——暗殺という突然の死とはいえ——死をむかえるのである。そして結局はこのようにして彼の娘テクラも死んだ。この作品の中での最も正確な判断の持ち主，文字通り心で物事を見た彼女は誰よりも鋭敏に自分の運命を悟る。そして地上にはもはや留まるべき所がないと知ると一切を振り切り，驚くべき勇気をもって死に向かうのである。マックスもまた自ら死に向かう。ヴァレンシュタインから別れたその足でスウェーデンを攻撃したのではなくて，一時冷静になり，それから自殺的に突撃したのだと見る方がいい。おのれの自律・独立が人間性への誠実さを守ってのみ得られるのであり，一方父と友とのいずれについてもそれを破るのであれば，破る行為をしないままに死にゆくより他はないのである。

悲劇の中の人々はこのようにして何かに駆られて死んでゆく。そしてその何かの実現が不可能であることを通じてその駆るものを鮮明に表わしゆくのである。この三人はいずれもその生を駆りたてたものと同時に鮮明な形姿をわれわれに残してゆく，とすればオクタヴィオは何をもってその輪郭を完成しようとするのか。

ピッコロミニ候爵という宛名は付け足しのものとしては余りにも意味が大きい。この称号は忘れかけた彼の裏切りを，ヴァレンシュタインを倒して候爵になる気かというマックスの言葉とともにわれわれに思い出させる。そして赤いカーペットにくるまれたヴァレンシュタインの暗殺死体と好対称をなすのだ。細かい事情を知らないゴルドンさえもが非難のまなこで彼を見る。彼の功績からして当然だといえるこの称号は，しかしこの場を選んでこれを彼に与えたのは宮廷というよりは作者シラーである。

しかしそれに対する苦痛に満ちて天を仰ぐ彼の姿も意味は大きい。彼のその苦痛は，地上ではすべてこのように終る，という苦痛である。宮廷を守るために命を賭し，結果的にはひとり息子を，しかも自分を軽蔑したままで死なせさえして為した仕事の代償がこの親書の宛名である。地上のものでない衝動に駆られて行動したマックスとテクラが，地上から去りつつわれらの脳裡にその姿を残してゆくように，あまりにも地上的な目的で行動し，

地上的な物事しか見ようとしなかったオクタヴィオはそのまま地上に残るのだといえようか。彼の感じた苦痛は彼の人格の巾に比例し，その巾に従って深いものであるのだが，しかしこの苦痛ゆえにこそ彼の映像もわれわれの心に残るのである。

ヴァレンシュタインはいうなれば時代の主流という幹から分れ出た一本の枝である。この枝は幹の成長を麻卑させて自ら幹となるほどの力をもたず，それでありながら幹の成長や存続に害を及ぼす場合，幹の在り方そのものによって切り落される。しかしそのことは落された枝が美しくないこと，美しい花を持たないことを意味するわけではないし，幹の在り方が常に正しく，また常に人を納得させるものであることを意味するわけでもない。悲劇の世界とはいうなれば幹のそのような在り方によって切られてゆく美しい枝の描写なのであろう。この劇におけるオクタヴィオはこの美しい枝を切り落すべき道具なのだが，それは切るべき枝によって違うが為に，切られた枝とともに捨て置かれる。それゆえこれもまた悲劇の世界に属するのである。

※この小論は過日，東北独文学会で行なった口頭発表に加筆訂正をほどこしたものである。

テキストおよび主な参考文献

dtv Gesamtausgabe 6. Wallenstein.
Kurt Rothmann: Erläuterungen und Dokumente—Wallenstein
Karl Berger: Sehiller
Benno v. Wiese: Schller
Gerhart Storz: Der Dichter Friedrich Schiller